

「嵐を静める」

2015年06月27日

ルカによる福音書8章22節～25節。ある日のこと、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸に渡ろう」と言われたので、船出した。渡って行くうちに、イエスは眠ってしまわれた。突風が湖に吹き降ろして来て、彼らは水をかぶり、危なくなった。弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と言った。イエスが起き上がって、風と荒波とをお叱りになると、静まって風になった。イエスは、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われた。弟子たちは恐れ驚いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った。

漁師の弟子たちの生活の場であったガリラヤ湖は南北21km、東西13kmで、地中海の海面より213mも低い所にある湖である。すり鉢のような低地の底に水がたまってできた湖で、周りは山で囲まれている。上から見ると「エメラルドの湖」と言われるほどの美しさであるが、地形から突然、風が上から下に吹き降ろす嵐に一転する。イスラエル旅行に行った時、主イエス時代の漁船が湖底から引き揚げられたと聞いた。空気に触れると壊れてしまうので、展示できるように準備中で、見られなかった。上記のように、嵐に見舞われ沈没する舟があったということである。

主イエスと弟子たちは舟に乗って向こう岸に渡ろうと船出した。そこへ、ガリラヤ湖特有の嵐に見舞われた。主イエスは嵐の中、眠っておられた。突風は激しくなり、水をかぶり、沈没しそうになった。恐れた弟子たちは眠っている主イエスを起こし「先生、先生、おぼれそうです」と叫んだ。マルコ福音書の平行記事には「『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った」と書いている。おそらく、この言葉が最初の伝承ではないかと思われる。岩波訳は、弟子たちの言葉を「先生、私たちが滅んでしまうというのに平気なのですか」と訳している。

弟子たちの言葉は明らかにおかしい。彼らはガリラヤ湖の漁師で、幾度となく、嵐に遭遇したことがあっただろう。主イエスはナザレの大工である。主イエスに助けを求めるより、自分たちの力で対処するべきである。それなのに、滅んでしまうことに平気なのかと主イエスに責任があるかのように言っている。この記述は比喩であろう。舟は教会で、嵐はローマ帝国による迫害の嵐を指している。マルコ福音書が書かれた数年前、ネロ皇帝によるキリスト教の大迫害があった。クリスチャンは十字架にかけられ、猛獣に食い殺される狂気の迫害を受けた。神を信じ、主イエスに従う信仰に生きているにもかかわらず、理不尽に仲間たちが殺される状況に、神は何の助けもくださらない。教会は沈黙したままの神に対し、弟子たちの口に乘せ「おぼれてもかまわないのですか」「滅んでしまうというのに平気なのですか」と苦悩を叫ばせたのではないか。

福音書の記者たちは、主イエスは風と荒波を叱ると凧になる、混沌・カオスを静める神の子であると伝えようとしている。それを「弟子たちは恐れ驚いて、『いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか』と互いに言った」と書いている。

私たちの人生において、嵐、苦難に幾度となく遭遇する。その時、苦難の大きさに目を奪われ、浮足立ち途方に暮れる。しかし、嵐を制する主イエスが共にいてくださる、この方に信頼を寄せれば、必ず平安を得て、苦難を乗り越えることができる。私たちが苦難の度に経験した信仰の喜び、確かさである。